

真宗文庫

親鸞の「いのちの歌」
正信偈入門

古田和弘



東本願寺出版

本書について

本書は、真宗大谷派が発行する『同朋新聞』における古田和弘氏の連載（二〇〇二年八月号～二〇〇九年二月号）を書籍化した『正信偈の教え』全三巻をまとめ、文庫化したものです。本書における「はじめに」「あとがきにかえて」は、単行本当時のものをもとに掲載しています。

本書において古田氏は、真宗門徒の朝夕のお勤めとして親しまれる「正信偈」全百二十句の言葉の意味と、そこに込められた親鸞聖人のお心を懇切丁寧に尋ねてくださっています。特に弊派において、二〇二三年に宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要をお迎えするにあたり、本書が一人でも多くの方にとって、本願念仏に出遇われた聖人の慶びと、その教えにふれるご縁となることを願っています。

最後に、文庫化に際し発行をご快諾いただきました古田和弘氏に厚く御礼申し上げます。

なお、文庫化にあたり、文言の整理など、若干の編集を行いました。その編集責任は東本願寺出版にあることを申し添えます。

東本願寺出版

『けんじょうどしんじつぎょうしょうもんい顯淨土真實教行証文類』 愚禿ぐとく釈しゃく親鸞しんらん集

第一冊 顯淨土真實教行証文類序（総序）（真宗聖典149頁）

顯淨土真實教文類一（教卷）（真宗聖典152頁）

顯淨土真實行文類二（行卷）（真宗聖典157頁）

しょうしんねんぶつげ正信念ねんぶつ偈げ（正信偈）（真宗聖典204頁）

第二冊 顯淨土真實信文類序（別序）（真宗聖典210頁）

顯淨土真實信文類三（信卷）（真宗聖典211頁）

第三冊 顯淨土真實証文類四（証卷）（真宗聖典280頁）

第四冊 顯淨土真しん仏ぶつ土ど文類五（真仏土卷）（真宗聖典300頁）

第五冊 顯淨土方便化身土文類六（化身土卷本）（真宗聖典326頁）

第六冊 顯淨土方便化身土文類六（化身土卷末）（真宗聖典368頁）

ごじょ（後序）（真宗聖典398頁）

目次

はじめに

爾者婦大聖真言闋大祖解釈信知仏恩深遠作正信念仏偈曰……………20

偈前の文

婦命無量寿如来 南無不可思議光……………26

生きる依り処／いただいている名号

法蔵菩薩因位時 在世自在王仏所……………36

法蔵菩薩／法蔵菩薩の願い

親見諸仏浄土因 国土人天之善悪……………46

諸仏の浄土

建立無上殊勝願 超発希有大弘誓……………52

この上にならない勝れた願い

五劫思惟之摂受 重誓名声聞十方……………58

深い思い／さらなる誓い

普放無量無辺光 無碍無対光炎王 …………… 68

清浄歡喜智慧光 不断難思無称光

超日月光照塵刹 一切群生蒙光照

如来の光明／最後の依り処／光に遇う

本願名号正定業 至心信楽願為因 …………… 80

本願のかたじけなさ

成等覚証大涅槃 必至滅度願成就 …………… 86

往生の確定

如来所以興出世 唯説弥陀本願海 …………… 92

釈尊が世に出られたわけ／仏説無量寿經

五濁惡時群生海 応信如来如実言 …………… 102

この世間に生きる私たち／五濁の惡時

能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃 …………… 112

喜愛の心／煩惱と涅槃

凡聖逆謗齊回入 如衆水入海一味 …………… 122

凡夫も聖者も

撰取心光常照護 已能雖破無明闇 …………… 128

貪愛瞋憎之雲霧 常覆真實信心天

常に照らされている私の事実／信心を覆うもの

譬如日光覆雲霧 雲霧之下明無闇 …………… 138

信心を覆うとも

獲信見敬大慶喜 即橫超截五惡趣 …………… 144

大きな喜び／苦惱を超える／横に超える

一切善惡凡夫人 聞信如來弘誓願 …………… 158

仏言廣大勝解者 是人名分陀利華

聞信するということ／分陀利華

彌陀仏本願念仏	邪見憍慢惡衆生	168
信樂受持甚以難	難中之難無過斯	
邪見・憍慢／難の中の難		
印度西天之論家	中夏日域之高僧	176
顕大聖興世正意	明如来本誓応機	
七高僧／信心の伝統		
釈迦如来楞伽山	為衆告命南天竺	184
龍樹大士出於世	悉能摧破有無見	
龍樹大士／有無の見		
宣説大乘無上法	証歡喜地生安樂	194
大乘無上の法／歡喜地		
顕示難行陸路苦	信樂易行水道楽	204
難行か易行か		
憶念彌陀仏本願	自然即時入必定	210

唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩

如来大悲の恩徳

天親菩薩造論説 帰命無碍光如来

天親菩薩／浄土論

依修多羅顕真实 光闡横超大誓願

真实を顕す／横超の大誓願

広由本願力回向 為度群生彰一心

本願による回向／一心

帰入功德大宝海 必獲入大会衆数

大会衆の数に入る

得至蓮華藏世界 即証真如法性身

往生成仏

遊煩惱林現神通 入生死園示応化

往生人のこころ

258

252

246

236

226

216

本師曇鸞梁天子 常向鸞処菩薩礼 …………… 264

曇鸞大師

三藏流支授淨教 焚燒仙經歸樂邦 …………… 270

淨土の教えに帰す

天親菩薩論註解 報土因果顯誓願 …………… 276

本願他力の伝統

往還回向由他力 正定之因唯信心 …………… 282

往相の回向と還相の回向

惑染凡夫信心發 証知生死即涅槃 …………… 288

凡夫の信心

必至無量光明土 諸有衆生皆普化 …………… 294

他力の回向

道綽決聖道難証 唯明淨土可通入 …………… 300

道綽禪師／聖道門と淨土門

万善自力貶勤修	円満徳号勸専称	310
他力の念仏		
三不三信誨慇懃	像末法滅同悲引	316
三不三信の教え		
一生造惡値弘誓	至安養界証妙果	322
誓願に遇うということ		
善導独明仏正意		328
善導大師／独り仏の正意を明かす		
矜哀定散与逆惡	光明名号顕因縁	338
悲しい凡夫を哀れむ／光明と名号		
開入本願大智海	行者正受金剛心	346
金剛の信心		
慶喜一念相応後	与韋提等獲三忍	352
即証法性之常樂		

慶喜の一念

源信広開一代教 偏帰安養勸一切…………… 358

源信僧都

専雜執心判淺深 報化二土正弁立…………… 364

報土と化土

極重惡人唯称仏 我亦在彼撰取中…………… 370

煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

極重の惡人

本師源空明仏教 憐愍善惡凡夫人…………… 376

法然上人／善惡の凡夫人

真宗教証興片州 選択本願弘惡世…………… 386

真宗／選択本願

還來生死輪転家 決以疑情為所止…………… 396

疑いの心

速入寂靜無為樂 必以信心為能入

.....
402

信ずる心

弘經大士宗師等 拯濟無辺極濁惡

.....
408

七人の高僧がた

道俗時衆共同心 唯可信斯高僧説

.....
414

共に心を同じくして

まとめ

.....
420

あとがきにかえて

〈凡例〉

・本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。
・「正信偈」の漢文・書き下し文の表記は『真宗聖典』に、読み方は東本願寺出版発行の『真宗大谷派勤行集』に依拠しています。

はじめに

二〇〇二年八月から、宗派の『同朋新聞』どうぼうしんぶんに「正信偈」についてのお話を連載させていただきました。それをこのたび冊子にさせていただくことになったのであります。

「正信偈」は、日ごろ多くの人びとがお勤つとめに用いておられるお聖教しょうぎょうです。

「正信偈」は、親鸞しんらん聖人が、ご自分のところにまで伝え届けられた念仏の教えの伝統を、深い感銘をもって受けとめられ、そして、その感銘を味わい深い詩げもん（偈文）によって、後の世の私たちに伝え示してくださったものなのです。

偈文というものは、普通の文章にくらべると、一句ごとに文字の数に制限があります。そのため、理論的な説明には適しているとはいえません。しかし、心の感動を直截ちよくせつに、しかも味わい深く伝えるには勝すぐれた表現となります。親鸞聖人はそのような表現の方法を選ばれたわけです。

「正信偈」は、まさに、私たちに届けられている「いのち」の歌ともいふべきものなのです。また、親鸞聖人が、間違いのない念仏の教えに出遇であわられた、その歓びのお気持ちを率直に表明された「歓よろこび」の歌であると思います。

勤行ごんぎょうのときに、この偈文を人びととともに声を調ととのえて称とえるのは、この歌に表されている感動を味わいつつ、聖人が示された念仏の伝統の意味を一人ひとり感謝をもって噛みしめ、その教えの大切さを互いに確かめ合うことになるのです。私たちが何なを依より処ところに、何に喜んで生きてゆくのか、それを日々に確かめることになるのです。

私は、二〇〇一年四月から、二〇〇八年三月まで、九州大谷短期大学に勤めさせていただきました。この短期大学では、三つの学寮に、一二〇人ほどの女子学生が共同生活をしていましたが、私は、一つの学寮の一室に住まわせてもらっております。学寮では、毎朝七時から寮のお仏間で勤行を行います。私も参加させてもらっていましたが、寮生たちは、大きな声で元気よく「正信偈」をあげておりました。もともと「正信偈」のことなど、まったく知らずに

入寮してきた新入生も、いつの間にか、「正信偈」も「和讃」わさんも「回向」えこうも、全部そらで覚えてしまっておりまし。しかし、彼女たちは、ほとんどが仏教学科の学生ではありませんので、「正信偈」にはどのような教えが述べられているのか、その意味を学ぶ機会がありませんでした。そのことを私はいつも心苦しく思っておりまし。他にもそのような若者たちが多数おられるわけですから、せめて「正信偈」の語句の意味だけでも、伝える方法はないものかと案じておりまし。が、ちょうどそのころに、この連載のお話をいただいたのです。

また、学校以外でも、「毎日のお勤めの時に『正信偈』をあげているけれども、その意味をくわしく考えたことがありません」という言葉をしばしば聞くことがありまし。あるいは、「言葉が難しくよくわかりませ」ということもよく耳にまし。なかには、「あれは呪文じゅもんだと思ていまし」という人もおられまし。そのような方々に、「正信偈」の言葉の意味と「こころ」を少しでもご報告できればありがたいと思て筆を執てまいまし。

「正信偈」には、専門の教学者が精魂こめて研究なさつて著あらわされた書物がいくつ出版されています。けれども、多くは、専門用語が盛んに用いられていて、素人にはとても難しく、なかなか理解が及びません。そしてそれが理解できないと、自分には親鸞聖人を仰あおぐ資格がないような感じがして、とても不安になることがあります。

私は、学生として大谷大学で学び、後に教員として長らく勤めさせていたただいた者であります。が、「正信偈」を専門的に研究してきた者ではありません。けれども、「正信偈」のお育てにあずかつてこられた先人のご教示を仰あおぎながら、私なりに、できるだけわかりやすくお話をすすめるような心がけました。しかしながら、親鸞聖人のお心についても、先人のご教示についても、私の理解の誤りや足らざるところが多々あることかと恐れています。このため、このたび冊子にさせていただくについては、ためらいがありました。が、ご指示にしたがうことにいたしました。ご叱しっせい正たまわれれば幸いに存じます。

『同朋新聞』の連載中、せっかくだから現代語和訳をつけるべきであるとい

うご意見が、読者の方々から多く東本願寺出版（出版部）に寄せられたと聞きました。それで、このたび冊子に改めるに際して、和訳をつけるよう、ご指示をいただきました。これにもためらいがありました。お聖教は、知的な理解に満足するべきものではなく、何度も反復して触れることによって、体全体でいただくものだと思うからです。また、小賢こざかしく安直な和訳を施すほどこしことによつて、親鸞聖人の高潔な格調を損なうばかりではなく、聖人のお心の曲解を流布るふさせて、それこそ誹法ほうぼうに陥る恐れがあるからです。

けれども、やはり、若者たちの戸惑いや、今までご縁のなかつた方々の困惑に思いを向けますと、私なりの義務のようなものを感じます。現代語和訳というほどのものではなく、あえて私の言葉で言い直させてもらうとどうなるのか、それをお示しすることにいたしました。これを批判的に踏み台にしていただき、先人がたの業績に学んでいただいて、聖人のお心に触れていただければ幸いに存じます。

爾者ハ歸シ大聖ノ真言ニ閱エチシテ大祖ノ解ニ釈ニ
信ニ知シテ仏恩ノ深遠ナルヲ作テ正信念ヲ佛ク曰、

書下し

しかれば大聖だいしょうの真言しんごんに帰きし、大祖だいその解げ釈しゃくに閱えつして、
仏恩ぶつとんの深遠じんのん
なるを信知しんちして、正信念しょうしんねん仏偈ぶつげを作りて曰いわく、

意訳

(私、親鸞しんらんは)、釈尊しやくそんの真実しんじつのお言葉ことばに従したがい、また七高僧しちこうそうのご解げ
釈しゃくを拝見はいけんして、阿弥陀あみだ仏ぶつのご恩おんの深く遠とほいことを知らせていた
だいて、ここに、正しく念ねん仏ぶつを信しんずる偈うたを作つくって、(以下の通とほ
りに)申まをし上げるのです。

偈前の文

私たちは日ごろ、朝夕のお勤めに用いる勤行本によって「正信偈」に接しています。親鸞聖人が著された『教行信証』に収められているものです。『教行信証』というのは、親鸞聖人の代表的なご著作です。聖人は、このご著作によって、浄土の教えが「真実」であることを顕かにされたのです。その意味で、真宗の教えの根本となる聖教であるわけです。『教行信証』は六巻からなる大著ですが、その第二番目、「行巻」の末尾に「正信偈」が添えられています（真宗聖典204～208頁）。

「正信偈」は、くわしくは「正信念仏偈」といいますが、それは、「念仏の教えを正しく信ずるための道理を述べた偈」というほどの意味です。漢文で書かれた詩で、七文字を一句とし、百二十句、六十行からなっています。

親鸞聖人は、『教行信証』に「正信偈」を掲げられるに先だって、まず「正信偈」をお作りになった、そのお気持ちをも、「しかれば大聖の真言に帰し、大

祖その解げ釈しゃくにえつて、仏ぶつ恩とんの深じん遠のんなるを信しん知ちして、正しやう信しん念ねん仏ぶつ偈ぎを作つくりて曰いわく」
 (真ま宗しゆ聖せい典てん203頁)と述べておられます。

「大だい聖せいの真ま言ごんに帰かへし」とあるのは、釈しゃく尊そんが説まかまれた真まのしおと言ごん葉えつを依よりじ処じとす
 る、ということです。釈しゃく尊そんは、『仏ぶつ説せつ無む量りやう寿じゆ經きやう』というおと言ごん葉えつをお説せつきになりま
 した。そしてこのおと言ごん葉えつのなかで、阿あ彌み陀だ如に來らいがすべてのを人にんを救すくいたいと願ねがわれ
 た、いわゆるを彌み陀だのほん願がんのを教おしえられたのです。それがだ大だい聖せいのま真ま言ごん、つま
 りし釈しゃく尊そんのま真まのお言ごん葉えつということなのです。親おん鸞らん聖せい人にんは、「正しやう信しん偈ぎ」を作るにあ
 たつて、この『仏ぶつ説せつ無む量りやう寿じゆ經きやう』のを教おしえを依よりじ処じとされたというわけです。

次つぎの「大だい祖その解げ釈しゃくにえつて」というのは、インド・中ちゆう国こく・日にっ本ぽんの三さん国こくに出ら
 れた七しち人にんの高たか僧そうが、『仏ぶつ説せつ無む量りやう寿じゆ經きやう』のを教おしえを正ただしく受うけとめられた、そのご
 解げ釈しゃくを手がかりにする、ということです。親おん鸞らん聖せい人にんは、『仏ぶつ説せつ無む量りやう寿じゆ經きやう』につ
 いてのご自じ分ぶんのを見み解げを主張ちやうしようとされたのでなく、三さん国こくの七しち高たか僧そうのご教きやう示し
 を仰あおがれたのです。

親おん鸞らん聖せい人にんは、ごご自じ身しんを見つめるのに大だい変へん嚴げんしい眼まなこをおもちでありました。ご

自身を、愚かおろで罪深い凡夫ぼんぶであると見究みきわめておられたのです。実は、そのような凡夫を何としても助けたいというのが、『仏説無量寿経』に説き示されている阿弥陀如来の本願なのです。親鸞聖人は、このような『仏説無量寿経』の教えを依り処とし、また、このお経の教えについての大先輩がたのご解釈によって、釈迦牟尼仏しゃかむにぶつ（釈尊）と阿弥陀仏あみだぶつの恩徳おんてくがまことに深いことを信じさせてください、知らせてもらったことを喜んでおられるのです。そのことを「仏恩の深遠なるを信知して」といっておられるのです。そして、自ら信ずるとともに、人にも教えて仏の恩の深いことを信じさせるために、「正信偈」をお作りになったのです。

「正信偈」は、全体を大きく二つの部分に分けて見られています。その一つは、「依経段えきやうだん」といわれていますが、これが、先ほどの「大聖の真言」に当たる部分です。すなわち、仏の大悲が説かれている『仏説無量寿経』の要かなめとなる教えについて讃嘆さんたんしてある部分です。いま一つは「依釈段えしゃくだん」といわれますが、これは「大祖の解釈」に当たるところで、七高僧お一人お一人の教えを紹介

し、それぞれの高僧の徳を讃^{たた}えてある部分です。

私たちが、日々のお勤めの時に「正信偈」をあげ、またこうして「正信偈」の「こころ」に触れようとするのは、愚かで、情けない生き方しかできていない者が、親鸞聖人のお勧めの通りに、「大聖の真言」と「大祖の解釈」を讃嘆し、その恩徳に感謝することになるのです。